

ねりまの文化財

文化財講座抄録

シルクへのあこがれ

東京農工大学繊維博物館 並木 寛 先生

(二月一日に実施した文化財講座の内容を文化財係の責任で抄録したものです)

本日は絹についてお話をしたい。絹は蚕の繭が原料である。絹は昆虫の巣を人間が衣料として使い出したユニークな繊維である。

蚕が繭を作るとき出す糸を繭糸と言う。現在は繭の品種改良が進み、一つの繭から一〇〇メートルから一五〇メートルの繭糸がとれるようになった。繭糸の表面にはセリシンという粘着力のある蛋白質が付いており、熱湯に入れてセリシンを溶かし、繭糸を七本から一〇本引きそろえ、一本の糸にしていく。このとき作られる糸を生糸と言ひ、繭糸から生糸を作りだす過程は座繰り、または(明治期以降は特に)製糸と呼ばれる。生糸に

は、まだ少しセリシンが付いているので絹になるとは思えないくらいゴワゴワしている。

セリシンをさらに溶かすため良く洗うと、生糸はセリシンがとれだんだん細くなっていく。この作業のことを「練る」と言ひ、生糸からセリシンを取り除いた糸は練糸と呼ばれる。この練糸から作られる繊維が絹である。ちなみに絹糸とは、繭糸・生糸・練糸などの総称である。

絹を作る技術は、紀元前三〇〇〇年頃中国で発見された。絹は生産するのが大変で他の繊維よりも光沢が良く高価なため、長い間庶民には縁がない繊維であった。日本で庶民が着用した繊維は、室町

委員会
課 教育係
区 社会文化財
馬 練社
3993-1111 内線7141
〒176 練馬区豊玉北6-12-1

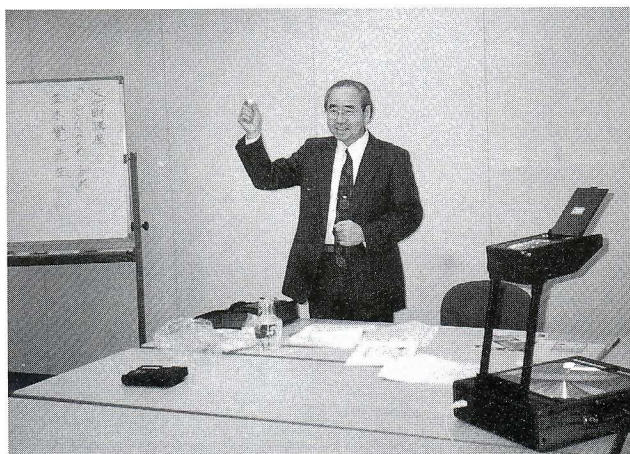
時代までは麻、それ以降は木綿であった。絹が上流階級に独占される一方、同じく繭を原料とする紬は庶民に使用された。穴あき繭や汚染繭などの屑繭を熱湯で煮るとセリシンが溶解

しマシユマロみたいにフニャフニャになる。これが真綿で、それを手で引き伸ばし紡いだ糸を紬糸と呼ぶ。この糸で織った繊維が紬で、養蚕農家の副業として各地で作られた。

話しかわるが、製糸の技術は六世紀頃には欧州へ伝播していた。西洋人には日本人以上に絹に対する憧れがあったようだ。ところが、一九世紀に欧州では蚕の伝染病が流行り、蚕が全滅してしまった。ちょうどこの頃、日本が開国し、欧州諸国は日本に生糸を求めた。ところが、日本の製糸レベルは低く、大量生産できない上、質的にも西洋人が求めるものと隔たりがあった。明治期になり日本人が渡欧するようになったとき、フランスのリヨンなどで機械を使って、質の良い生糸や絹を作っている事実を知り、日本のように幼稚な器械で生糸を作っていたのは対抗できないことに気がついた。そこで、明治政府はフランスの最新鋭の機械

を導入し、十数人のフランス人技師を招き、群馬県に官営の模範製糸工場を作った。これが富岡製糸場で、各藩は女工として藩士の子女を派遣し、製糸の技術を学ばせた。これにより製糸の技術は広がり、各地に機械製糸工場が設置された。その中心をなしたのが長野県の諏訪湖周辺であった。

明日皆さんが行かれる八王子市鏈水の絹の道資料館は、当時絹の集散地であった八王子から横浜港へ生糸を運んで行く途中にあり、この道を絹の道とよんだ。政府は群馬県から横浜港までの生糸の運搬の便をはかるため高崎線を開通させたが、民間ではこれより近道をとって、群馬



県から八王子を経て横浜港へ生糸を運んだ。開港後、鑓水の農民は生糸を扱う商人になり、横浜港に近いという地の利をいかし、値が上がるのを見計らって生糸の出荷を行った。このため、この地域は一時期大変な資産家を生んだ。

第二次大戦前の日本は養蚕業・製糸業が大変盛んで、生糸が国力を作ったといっても過言ではない。輸出された生糸は欧米で婦人用のストッキングにされた。ところが、昭和十二年(一九三七)に米国でナイロンが発明されると、絹にくらべて安価で丈夫であったため、日本の生糸は買われなくなってしまう。

日本では絹の使い道は主に高級和服に限定されており、下着には使用されなかった。このため、戦後も製糸業は戦前の水準に復帰しなかった。しかし、絹を日常的に使ってもらいたいということから、絹糸と合成繊維を合わせたニューシルクという糸が発明された。

ニューシルクの一つにハイブリッドシルクがある。これは、ナイロンを芯にして、絹糸をその表面に巻き付けて一本の糸にしたものである。芯がナイロンであるので、純粹の絹よりも丈夫で、しかもある程度水洗いが可能という利点がある。現在、ニューシルクを下着に使ってもらうようキャンペーンが行われているところである。

最後に絹の特徴についてふれる。

一 光沢が華麗である。これは、絹糸の断面が三角形であるためである。丸形だと乱反射するが、三角形は平面的な反射をする。このため、他の繊維にない光沢を生む。

二 天然繊維の中で最も細い繊維であるから、優しい肌ざわりがある。

三 動物性タンパク質でできているので染色しやすい。その反面シミがでやすく、汚れやすいという欠点がある。

四 優れた吸湿性を持ち、汗をすぐ吸う。また放湿性にも優れ、吸った汗の乾きも速い。高価なため下着に使われてこなかったが、健康的で人間の肌に合う繊維である。

五 保温性があり、人間の体の熱を逃がさない。面が平らなため触れた瞬間は冷たく感じるが、長く着ていると暖かい。

断面が三角形であるため、引きそろえるのと面と面の間に空気の入るすき間ができ、空気が熱を絶縁する働きを持ったためである。

六 動物性タンパク質でできているため燃えにくい。ナイロンやポリエステルのように燃えてくっつくことがない。

七 動物性タンパク質のため紫外線をカットした太陽光線を通してくれる。しかし、紫外線をよく吸収するので黄色に変色する欠点を持つ。

彦根秤

彦根秤は、小型の下げ皿竿秤の一種です。江戸時代、近江商人が、この秤を持って全国津々浦々まで商取引したところから、この名が生まれました。

資料室で保管している彦根秤の竿は象牙製で、全長二一センチメートルです。竿には計量物を載せる皿が吊り下げられます。皿はしんちゅうでできており、検定済であることを示す「新器検」という文字と、商標である「弥次郎兵衛」の刻印があります。この皿は、大阪衡器という会社の製品で、明治九年(一八七六)から明治三五年(一九〇二)の間に製造されたものと推定されます。

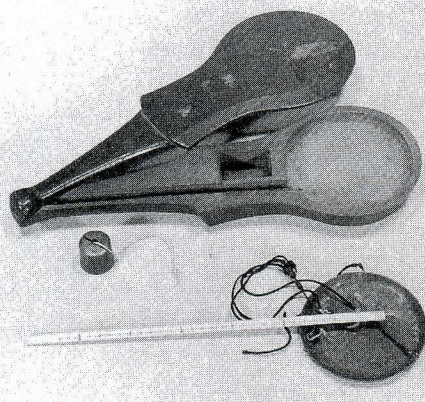
彦根秤の特長は小型なので軽く、収納ケース付きで持ち運びが便利な点です。資料室にある彦根秤の収納ケースは木製で、全長二六センチメートルでひょうたん形をしており、「明治二十五年四月四日求之」と墨書があります。ケース蓋の表には商標の焼印、裏には秤量の焼印があります。ケースの中に竿、分銅、皿がすっぽり納められるよう工夫があります。

彦根秤の主な用途は、金、銀、薬、生糸などを計ることです。秤量の単位は匁、厘です。ちなみに一匁は三・七五グラムで、一厘はその百分の一にあたります。

少量のものまで細かく計ることができま

す。皿に計る品を載せ、片手で紐を持ち上げ、もう一方の手で分銅を左右に移動させながら、釣り合ったところで、竿の目盛りを読み取ります。

繭の仲買商人などは、この秤でサンプルを計量しました。石神井・大泉地区では養蚕が盛んでしたから、養蚕農家の中にはこの秤を使って繭の収穫時に、繭の重さを計る家もありました。彦根秤は、繭の売買のときなどにも重要な役割を果たした秤です。



千川家文書が寄贈されました

平成八年二月二四日に、千川仙司氏より古文書が寄贈されました。

千川仙司氏は、千川上水の開きを請け負った千川徳兵衛の末裔にあたります。上水の開きく工事は、元禄九年(一六九六)に始まりましたが、幕府の支出だけでは資金が不足し、徳兵衛は私費を投じて工事を完成させました。この功績によって徳兵衛は千川の姓を名乗ることが許され、千川家が上水の管理にあたることになりました。

千川上水は玉川上水から分水され、練馬区内は現在の千川通りにあたる所を流れ、農業用水として利用されるなど区域の人々の暮らしと密接に関わっていました。

今回寄贈していただいた古文書は、千川上水に関わるもので、総点数は元禄九年(一六九六)から明治一七年(一八八四)までのもの二九六点です。年代的には、近世文書一六八点、近代文書六二点、年代不詳の文書六六点です。

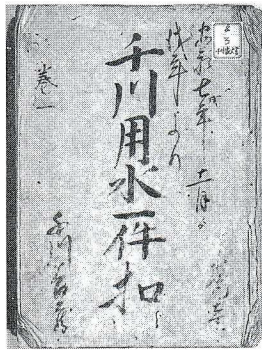
寄贈された文書の中に、「千川用水一件」という冊物があります。これは、千川上水を用用として利用した村々から千川家に宛てた書状や、千川家から諸役所へ差し出した上申書を写したものです。欠けている年次は多少ありますが、明和

五年(一七六八)から明治二六年(一八八三)までの諸文書を写した冊物が二一点あります。

また、絵図類は二一点で、千川上水周辺の様子が描かれています。練馬区域のみならず、今までよくわかっていなかった江戸府内の配水の様子を示した絵図も残っています。

千川家文書については、東京都公文書館に一部の写しがあり、『東京市史稿 上水篇』に紹介されていますが、ほんの一部分に過ぎず、千川上水に関する研究は充分ではありませんでした。

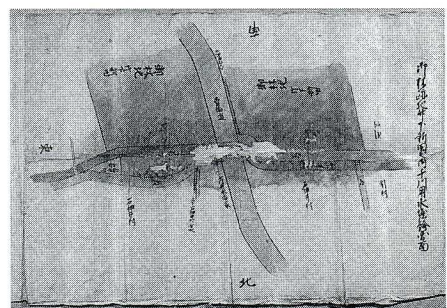
このたび寄贈を受けた千川家文書は、上水を歴史的に解明する貴重な史料となります。今後、区民の皆様が活用できるように整理を行っていく予定です。末筆ながら、ご寄贈下さいました千川仙司氏、並びに関係者の方々に厚く御礼申し上げます。



千川用水一件



千川上水普請勤務の手形



千川上水絵図面(現在の立野町付近)

刊行物の紹介

『練馬区の遺跡Ⅱ』

昭和五九年発行の『練馬区の遺跡』が絶版となったため、最新の成果に基づいて全面改訂したものです。また、練馬区全域について遺跡分布図を掲載するとともに、練馬区の遺跡について書かれた発掘調査報告書、学術論文の一覧表を掲載しました。この本の刊行を機に遺跡保護へのご理解へとつなげていただければ幸いです。頒布価格は三四〇円、頒布窓口は区民情報ひろば(区役所本庁舎二階)、郷土資料室(石神井図書館内)です。



『練馬区の文化財あんない』

平成七年度までに国、都、区が指定・登録した文化財で普段皆さんが見学できるもの、寺社、古道、ねりまの散歩道などを地図、写真で紹介したものです。区民情報ひろば(区役所本庁舎二階)、社会教育課文化財係(同一階)、郷土資料室(石神井図書館内)で頒布中(無料)です。

江戸時代における石神井川の
利用について

文化財保護推進員 鈴木 曹元

江戸幕府は、江戸を中心に交通網を整備し、街道や宿場にさまざまな規定を設けた。東海道では宿場一つに人足一〇〇人、馬一〇〇頭をいつも用意しておくことを義務づけている。宿場では間口一〇間に馬一頭の基準で人馬が配置された。備えた人馬を利用して、次の宿場まで人や荷物を運び、次の宿場ではまたその次の宿場まで、同じように輸送を行った。

日本橋から京都へ向かう江戸時代の主要路は中山道で、その最初の宿場は板橋宿であった。板橋の宿場は、平尾宿、中宿、石神井川を挟んで上宿と三つに分かれていた。

このうち中宿は、現在仲宿と改められ、幕末に廃寺になった遍照寺はここにあった。その境内は宿場時代に馬つなぎ場があった場所で、荷物の継ぎ立てなどの用をなす馬が五〇頭つながれていた。現在でも、寛政一〇年(一七九八)建立の馬頭観音像が建ちそのなごりをとどめている。また、旧家の地券によると、明治初期にはこの付近の小字を番場といったの宿場の馬を置いた場所を馬場といったの

で、それが転じて番場になったものと考えられる。

宿場で働く馬は日本在来種で、サラブレッドに比べると体高は三〇センチメートルから四〇センチメートルも小さな馬であった。小さい体ながら、重い荷物を運ぶことができる頑丈な働き者であった。一日に一頭の馬は四・五キログラムから五キログラムの飼料(草、稲藁、雑穀、塩、魚粉)を食べ、その消化率は三八パーセントで、残り六二パーセントは糞として排泄される。板橋宿には常時五〇頭の馬がいるので、宿全体で一日に二五〇キログラムの飼料が馬に給されるから、排泄された馬糞の総量は一五五キログラムぐらいであったと思われる。

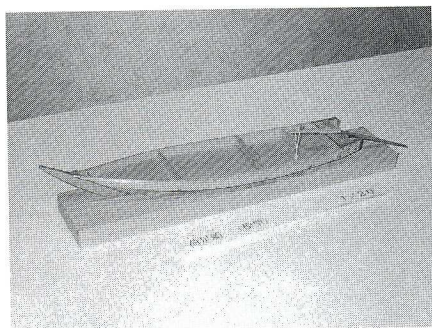
江戸時代はリサイクル社会で、宿場の馬糞や人糞、ゴミは畑の肥料として利用された。板橋宿で排出された馬糞は当時農村であった練馬区域の村にも運ばれ、肥料として用いられたことであろう。

一方、練馬区域の農村では青草や雑穀が飼料として栽培されていた。これらは板橋宿へ運ばれ、利用されたことだろう。このように板橋宿から練馬の村々に馬糞が運ばれ、練馬の村々からは板橋宿に馬の飼料が運ばれたが、運搬は石神井川の荷足船で行われた、と私は思う。荷足船は運送コストが低廉で、駄馬にくらべると一度により大量の荷が運べるからで

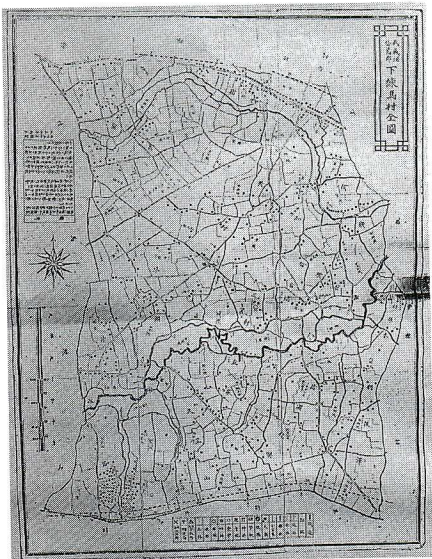
ある。

明治期から昭和戦前期の地図を見ると石神井川は、現在のように直線的な流れではなく、あたかもS字をつなぎ合わせたように蛇行しながら流れていた。また、昭和一五年頃、川の深さは五〇センチメートル以上はあった。このように蛇行した流れで、ある程度の深さを持った川は荷足船の運行に最適であった。

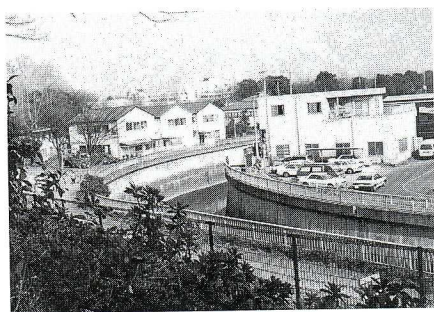
板橋仲宿番場で石神井川は分流する



荷足船模型 (所蔵: 船の科学館)



下練馬村全図 (明治37年調整、大正8年修正 新井家文書)



石神井川 (氷川台一丁目付近)

が、ここに船を係留する場所があった。また、練馬の方に目を転じると石神井川の本流より三〇メートル奥に入った所(練馬区桜台六十七付近)に河岸とよばれる家があり、出子谷(開進第二小学校北側)を水源とする石神井川の支流に面していた。ここと板橋宿番場の間を、荷物を積んで石神井川の荷足船は往復したのである。